

## 環境事始 七帖 研究室の作り方

半休先生は元来知識もなく、失策も多く人に教える事はないのだが、ただその育ちからものを創り出す才能を備えたように思う。研究室の作り方である。先ず始めに少年期負け戦の食料難に空き地に畑を作り田ん圃を拓いた。拾った苗を植えて二俵半の米を収穫、一家の飢えを凌いだ。こうして自給ができる自信は心の支えとなった。学んだ新設の大学は師弟共々から始める状況で、大体が日本全土焼け野原だったのだ。器具は手造りで対象は火山や河川で只の自然。勤めた仕事がオゾンを使う研究工場で毎日が応急工夫の連続。次いで始めた環境研究がこれが又無から有を産む作業、やっと公害なる言葉が言われ始めた頃であった。部屋を整備するに予算がないから、年度変り目によその研究室で廊下に抛り出してある机や椅子を勝手に拾ってきて、もし要るものなら何号室に取りに來いと書いて置く。大抵は文句を言って來る者はない。実験は薬品を使う課題は避け、電気機器を使用するに限る。なぜなら消耗品は予算が多く掛かり、電気代はいわば只。全て貧乏性のなせる業。それに装置は実は借りればよい。当時、機器分析装置は日進月歩数年経てばもう売り物にならぬ。だから一旦借りれたら返還は請求されない。これは後年富山で自らの教室を作った際実行した。地方の教育学部といえば設備などまず無理な相談。そこで島津製作所に手紙を書いて最新のガスクロマトグラフ装置の借用を申し入れた。夏休み近く荷物が到着した。次年度の予算に GC 一台を計上したら、教育学部で最新の機器など競争がないからすんなり通った。これで卒業研究二人分が揃った。日本電子の人が来て「GC は後発でシェアがなく困っている」と愚痴るから、「島津はうちに入れている、うちに入れるのが早道である」と言ってまた一台せしめた。次は原子吸光、こちらは島津が後発でここは北陸の要衝と説いて借りることができた。Mn、Cd の調査はこれで行った。もう一台は海鼠事件、昭和電工が海鼠の臭の損害で参っている。助けて給えと申すので、専用機として一台加えることができた。徒手空拳で研究室を立ち上げるには基本がある。1、場所、拠点である。2、装置、今の話。3、人員、仕事に応じて人は集まる。4、お金、技術があれば稼げる。これを逆に資金から始めると大抵失敗する。愈々半休先生は横浜で世界最強の研究所作りとなった。世間に机上解説の学者は多いが現場で調査能力のある研究者は居らぬ故、ぜひ頼むという次第だった。そしてそれには GC-MS が絶対必要条件。先生達が結果を出して普及したけれど、1600 万円、先生には來ない。やはり島津に借りる外ない。「始めてその性能を天下に示して些か功もあり、うちにはないのは筋が通らない」と。こうして貸してくれることになった。その調印に京都三条に出掛けたら、会議中大学から電話が入った。今予算が通ったとの知らせだった。先生は席に戻って、「お金は払います、有難うございました」と頭を下げた。こうして善意の人のお蔭で世界をリードする環境研究が始まった。しかし、しかしである、先生を呼んでくれた、若園教授が急病死し、北川教授が定年すくりに亡くなって、孤立無援。対して周りは敵ばかり。国立大学に環境研究所を作る使命を負わされながら、遂に目的を果たすことが叶わなかった。先生達は何もなくても困難に耐えた世代だったが、研究室を潰そうと企む人間から身を守る術は学ばなかったという訳か。